

# シッティングバレーボール競技における頭部外傷についての調査

田口恵<sup>1) 2)</sup>, 吉貝香織<sup>1)</sup>, 佐藤智恵<sup>1)</sup>, 本田優生<sup>1)</sup>, 中野由紀<sup>1)</sup>, 三星健吾<sup>1)</sup>, 田邊誠<sup>3)</sup>

- 1) 兵庫県理学療法士協会スポーツ活動支援部 2) 医療法人松藤会入江病院  
3) 医療法人社団松本会松本病院

**キーワード：**頭部外傷・シッティングバレー・スポーツ PT

## はじめに

近年スポーツ現場において頭部外傷への対応の重要性が注目されている。サッカーやラグビー、柔道などの競技ではその重要性が広まりつつあり、マニュアル等も活用されている。シッティングバレーボール（以下 sitting volleyball=SV）競技において頭部打撲の場面を散見するが、重症な事故の報告はない。そこで今回、SV 競技中の頭部打撲の発生有無と症状、対応についてアンケート調査を実施し、選手及び監督・コーチに対し障害予防の啓発活動を実施した。また同時にメディカルスタッフの頭部外傷に対する適切なサポートの向上につながることをも合わせて目標とした。

## 方法

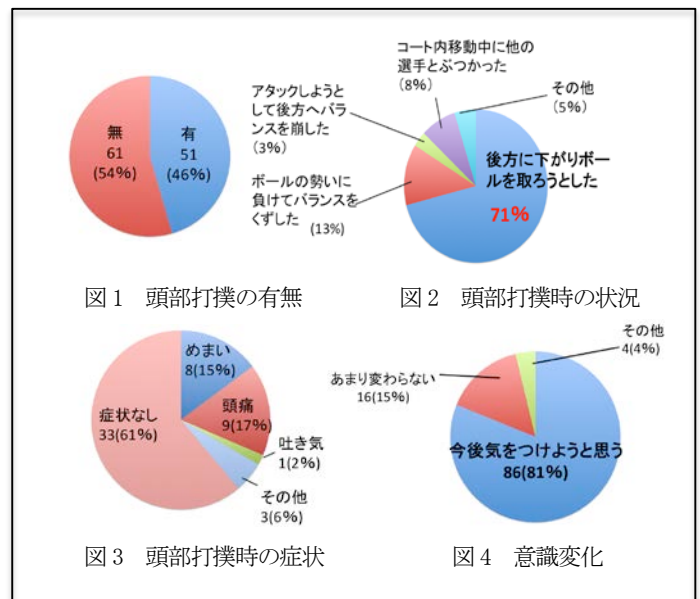
第 17 回障害者スポーツ交流館杯 SV 大会に参加した選手 155 名に対し、自己記入方式にて各チームにアンケートを配布し回答を得た。アンケート内容は年齢、性別、経験年数、障害の有無、障害の種類、頭部打撲の有無、受傷機転、受傷時の経験年数、症状、プレー再開の有無などである。有効回答数は 112 名であり、男性 53 名女性 59 名、障害のある選手は 30 名であり、内訳は切断、先天性奇形、二分脊椎などである。また、今回アンケートとともに脳震盪の症状や対応についてのパンフレットを配布し、脳震盪に対しての意識調査も行った。

対象者に対し、本研究の意義と守秘義務について十分に説明し、アンケートの回収をもって同意とした。

## 結果

年齢 10 代 3 名、20 代 41 名、30 代 35 名、40 代 18 名、50 代 13 名、60 代 2 名。経験年数 1 年未満 11 名、1～3 年 20 名、3～5 年 9 名、5～10 年 37 名、10 年以上 34 名。頭部打撲は 51 名 46% の選手が競技中に経験していた（図 1）。初めて頭部打撲した経験年数は、1 年未満が 20 人、3 年未満が 18 人、5 年未満が 10 人、10 年未満が 8 人、10 年以上が 4 人であった。頭部打撲時の状況は、後方に下がりボールを取ろうとした 71%、ボールの勢

いに負けてバランスを崩した 13%、アタックしようとして後方へバランスを崩した 3%、コート内の他の選手とぶつかった 8%であった（図 2）。頭部打撲時の症状は、無症状が 33 名、頭痛 9 名、めまい 8 名、吐き気 1 名であった（図 3）。そのうち 48 名 96% の選手がプレー再開し、2 名が中止した。病院を受診した選手はいなかった。作成したパンフレットをみての脳震盪に対しての意識は、今後気をつけようと思う 86 名 81%、あまり変わらない 16 名 15%、その他 4 名 4%であった（図 4）。



## 考察

約半数の選手が頭部打撲を経験しており、SV 競技において頭部打撲の発生頻度は高い。SV は床に座った状態で行うバレーボールであり、床に臀部を滑らせ移動を行う。競技経験が少ない選手は、移動を行うことだけでも困難である。ボールを追いかけ上体が後方に倒れた際、顎を引くなどの受け身が取れず、頭部打撲につながっている可能性がある。頭部打撲経験者の半数が SV 経験年数 3 年未満の初心者であったことから、技術面や競技特有の身体活動、転倒した際の受け身などが未熟

なことが考えられる。発生状況として後方へ下がろうとした動作が多いことから、競技特性も一つの原因と考える。また、今回の調査では頭部打撲後、約 6 割が無症状であったが、めまいや吐き気などの重篤な障害につながりうる症状が出現している選手もいた。しかしそのうち約 96%が競技を再開していた。また、病院へ受診した選手がゼロであったことから、頭部打撲後の症状や頭部打撲が引き起こす重篤な障害への認識が低く、適切な対応ができていないと推測できた。今回、アンケートとともに脳震盪の症状や対応についてのパンフレットを作成し配布した。パンフレット内容としては、気をつけておきたい症状や本人が気づいていない場合もあるため周りが気にかけるようにすることや、記載している症状がある際には競技を中止し、医療機関で受診することなどである。8 割以上の選手が頭部打撲時の症状や対応について「今後気をつけようと思う」と回答している。そのことから、選手や監督など競技にかかわるスタッフに対して、頭部外傷に対する正しい知識や症状に対する対応を啓発することが重要であると考えた。今回のアンケート調査では現状把握と選手に対する啓発活動が主であった。少数であるが重症につながりうる症状を呈したケースもあることから、今後も頭部外傷に対する正しい知識と対応を啓発することは重要であると考えた。また、スポーツ現場に携わるメディカルスタッフに対して勉強会開催やマニュアルの作成などを通して、様々な競技で起こりうる可能性のある頭部外傷に対する適切なサポートの向上につなげていきたいと考える。